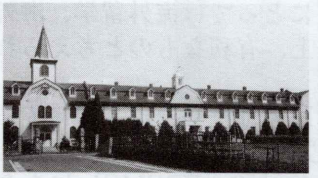
北辰 TOKYO

岐阜県立多治見北高等学校同窓会
東京支部会報　第11号



平成9年10月5日
発行人　鈴木　満

多治見北高創立40周年を迎えるにあたって

岐阜県立多治見北高等学校同窓会
会長　小芝　邦章

日本をはじめとし、世界各地の異常気象は、まるで地球の最後を象徴しているようではありませんか。いや本当、すこしもおおげさなものの言い方ではないと思います。そんな中、世界各国・各領域でご活躍の卒業生の皆さん、お元気なことと存じます。さて、見出しにもありますように、我々の母校も40歳を迎えようとしておりますが、人間で言えばまだまだこれからといったところでしょうか。

40歳を迎えるにあたり、同窓会では以下の行事を計画し、動き始めております。

1、名簿作成　2、記念事業　3、記念総会を計画しております。

名簿作成については、一番早く動き出してほしいと考えておりますが、基本的には、従来の方法ではなく（卒業生が調べ、作成していた）、専門業者に作成を依頼する方向で進みたいと考えております。卒業生も12,824名を数え、我々の善意の結集では立ち行かない時点にきたのでは、と考えます。

記念事業については、平成11年3月に新体育館が完成する予定ですので、学校側と協議の上、体育館内の備品的なものを寄贈したらどうか、と考えております。

記念総会については、前述しました体育館の完成をまって実施を、と考えています。

いずれにしましても、それぞれの委員会の中で、委員長を中心に、様々な案が検討されており、平成11年（10年度）3月に照準をあわせて、今後幾度となく会合を持つことになると考えます。

遠く岐阜県東濃の地を離れ、ご活躍の皆さんには今後も何かとお世話をかけ、ご無理をお願いすることになるかと思いますが、何卒ご理解・ご協力のほどお願い申し上げます。最後になりましたが、東京支部の益々の発展と充実を心より祈念申し上げます。

第8回支部総会・懇親会へ是非ご参加を

本支部総会・懇親会も今年で８回目、“おい、元気にやっとるか…やっとりゃーすかね”と言う、懐かしい東濃弁が聞かれる総会・懇親会のシーズンがやってきました。ここ数年100名前後の参加者、年度幹事の皆さんの熱意と努力で、年々楽しい、有意義な会となっております。

今年度の幹事は８回生、18回生、28回生の皆さん、フォーラム・懇親会といろいろ趣向をこらして同窓生の参加を待っております。フォーラムでは、病気と外科手術の話、講師はいずれも８回生、第一線で活躍中の外科医です。懇親会では恩師の先生を囲んで、又同期生、同窓生との懇談、久しぶりの再会等々、青春にかえり、東濃弁を交えての一時を過ごして頂けると思います。同窓生各位にはご多忙中のこととは存じますが同期生お誘い合わせの上、是非、ご出席頂きますようご案内申し上げます。

「少年よ、大志を抱け！」

8回生　**加納宣康**

我々の世代の人間にとっては海外留学、海外赴任というのはcareer形成上、有利なものと考えられてきたといってよかろう。

私も学生時代から医学部卒業後は米国にて卒後教育（トレーニング）を受けることを考えて、外国人のための米国での医師資格試験（ECFMG）にも合格していたが、あいにく私が卒業した時期（1976年）にはベトナム戦争が終了していて、米国に医師が溢れてしまった状態になり、外国入の医師をレジデントとして採用する余地は全くなくなったしまった。

私の目的は基礎医学の研究ではなく、あくまでも臨床外科医としての修行であったため、ひとまず渡米はあきらめ、日本で修行することにした。

その後も、チャンスがあればどこかで実行しようと思いながらも、段々と自分の力が評価されて、年齢としては破格の地位を与えられたりしているうちに、長期間日本を離れることはますます許されない状況となってきた。そんな中にも、自分は必ず世界を舞台に活躍してみせるぞ、という意識は待ち続けて外科医としての仕事のみならず、臨床研究にも精を出してきた。

医学の世界で認められたという意識を持つには、米国で認められたという何かを持ちたいと考えるのは当然である。留学経験なしでこれを達成する方法はないかと考えていたところ、世界で最も権威ある米国外科学会（American College of Surgeons, ACS）が毎年、世界で7人だけ、International Guest Scholar（IGS）を選出するという記事を日本外科学会雑誌で発見した。これに選ばれればとてつもなく大きな名誉だし、8，000ドルもらえて、dutyといえば、学会開催中の1週間は学会に出席して、その間にgovernors meetingで講演をして年末に報告書を提出するだけ、というありがたいものであった。忙しい自分の置かれている立場を考えると、今更のんびりと1年留学ということは非常にriskyな状況であったため、これに何とか通りたいものと考えていたが、応募資格が「研究機関に所属している者」となっていたため、これを発見した松波総合病院時代には応募できなかった。その後、帝京大学へ移ったため、研究機関所属としての応募資格を満たすことができた。どの程度の競争率なのか全く情報を得ずに応募したのだが、自分の業績からいえば、何となく通るのではないかと図々しく考えていた。幸い合格して1993年度のIGSという栄誉を得た。あとで聞いてわかったことだが、大変な競争でこれに通った日本人は私が第1号でその後も誰も通っていないため、いまも日本人では加納宣康ただひとりということになっている。

このIGSになったことが効いて、2年後には米国外科学会のフェロー（Fellow of Amerdcan College of Surgeons, FACS）にも選出された。日本人ではこれまでに100人がFACSの称号を得ている。先日のACS日本支部会では、私が唯一のIGSであることから、その体験談を中心にIGS of ACSについて講演する機会を与えられた。

若いときから夢見ていた長期留学は未だに実行できずにいるが、外国へ行っても胸を張って名乗ることができるだけのものは得られたと思っている。またインドのM.G.M. Medical CollegeからHonorary Visiting Professorの称号を与えられたのも大きな名誉でよき思い出となった。

ただ長期海外滞在の経験がないため、未だに英語のlistening comprehensionがpoorである。英語がよくできた笠原中学のエリート女生徒、水野克子さん（本会会員、8回生、現姓近藤）には今も大きく水をあけられたままで、その差は開く一方である。最近は老眼のみならず、難聴の傾向も出てきて、英語のみならず日本語のlistening comprehensionもpoorだと女房（多治見北高18回生、旧姓愛知清美）に笑われている。

笠原中学の男にとっては、克子を負かすことは一つの夢のようなものだが、人生残り少なくなりつつある。しかし、補聴器を着けてでも、加納宣康は永遠に“Boys be ambitious！”

1997/07/21高コレステロール血症の薬を服用しながら。

海外雑感
—ケネディ空港での出来事—

8回生　**可児重昭**

今年は南米ペルーの人質事件で幕を明け長期戦の末に波乱含みとはいえ何とか解決した。

南米といえばプロジエクトの関係で今から10年程前に約2ケ月間の出張をしたことを思い出す。

目的地への直行便はなくニューヨーク経由での南米入りだった。成田発正午の便にて出発しニューヨークには日本での出発日と同じ日の午前中に到着した。当日夕方の別の便に乗り継いで目的地へ向かうことになっていたため乗り継ぐまでの約10時間をケネディ空港近くのホテルで過ごすことになっていた。このケネディ空港で思わぬ出来事に遭遇した。

ケネディ空港での入国手続きに向かう途中の廊下の壁に「MR. KANI」の貼紙を発見した。有名人でもないのに不思議だと思った。よく読むと日本航空からのメッセージで「必ず空港内のJALカウンターに立ち寄って下さい」とあった。

空港での入国手続きの順番を待つことになり、とある列の最後尾に並んだ。ところが運悪く並んだ列の前の人が随分手間取ってしまった。同じ飛行機の乗客の中では最後の入国手続きとなった。機内で知り合った隣の席の青年とはお互いに挨拶もできないまま別れることになった。一人取り残されたまま手荷物の手続きを済ませ、心細く到着ロビーに出た。

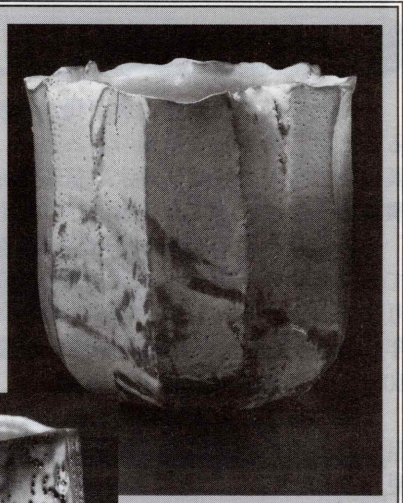
空港の到着ロビーに出ると二人組の男が近づいてきた。その内の一人が片言の日本語で話しかけてきた。「ホテルを世話しよう」とか「行きたいところがあったら案内しよう」という内容だった。はっきり「NO THANK YOU」と断ったがしつこくつきまとわれた。これには閉口した。「私は空港内のJALカウンターに行き手配済のホテルを案内してもらうことになっている」とはっきり理由を説明した。すると二人は「JALカウンターに連れて行ってあげよう」とすかさず答え勝手に案内しようとした。どういう訳か無意識に二人について行っていた。長旅の疲れと孤独感から二人の巧妙なやりくちにはからずもはまってしまっていた。ついて行かざるを得ない状況に追い込まれていた。意

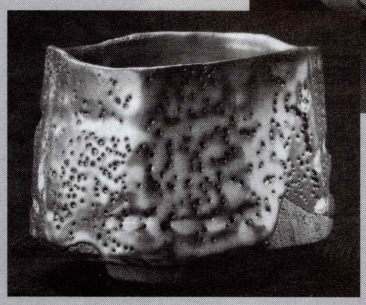
“美濃焼ー東京・最前線”

今年の夏、東京と多治見で陶芸展覧会が開催されました。東京では日本橋三越本店７階特設ギャラリーで、第25回“新作陶芸展”が開催され、この陶芸展に郷土の誇る二人の人間国宝、加藤卓男氏、鈴木蔵（おさむ）氏が出展され高い評価を集めました。この展覧会は日本工芸会が主催、我が国で卓越した技法を確立した日本工芸会陶芸部正会員の作家の作品を一堂に会したもの。“土と炎”の陶芸の歴史を地域ぐるみで、長い歳月とともに培ってきた東濃地域からは、二人の人間国宝の作品をはじめ、第一級の優れた秀作が出展され好評を博しました。

加藤卓男氏は“三彩紐飾香炉”を出展、清新にして深い味わいのある、若草色を帯びた作品には、作家の世界を見据えた志の高さと、気品が感じられた。加藤氏はペルシャの焼き物に通じ、その作品には国境を越えた文化交流と土着文化の素晴らしさが写し出されている。鈴木蔵氏は“志野茶盌”を出展、志野焼伝統の美しい白釉に、重厚な土色を帯びた作品には鈴木氏の爽やかで豪放な“蔵志野”の技がみごとに発揮されていた。日本橋三越本店の美術担当者は“日本工芸会の正会員の作家は厳しい研鑽を重ねて、独創的な作風を築いている。今回の展覧会でも、東濃の作家の方々の作品は人気が高かった。美濃焼には伝統を大切にしつつ、常に新たな世界を目指す創造力があり、今後の発展に期待する。”と絶賛。

一方、現代志野の第一人者、人間国宝の鈴木蔵氏の地元初個展、“蔵志野・織部展”が６月３日～８月３日までのロングランで、多治見市東町の県陶磁資料館で開催された。この個展には県内外の美術館や個人所蔵の逸品約40点が集められ、志野の茶盌や花瓶、水指を中心に織部の大皿などが展示され、繰り広げられる“蔵芸術”の世界に来館者はすっかり魅了されていた。





鈴木　蔵氏の作品
志野花器（上）
志野茶盌23（左）

鈴木蔵氏は1953年に多治見工業高校窯業科を卒業し、故荒川豊蔵氏（人間国宝）らに師事、志野に魅せられて創作に没頭、多くの独創的手法を生み出したことで知られ、清新かつ豪快で独創性あふれる“蔵志野”を確立した、現代陶芸の最高峰と言われております。皆さんも、東京で開かれる展覧会に、是非、足を運び、故郷の素晴らしい芸術に触れられてみては如何でしょうか。きっと陶芸の世界に魅了されることと思います。

識が戻り始めたのかとんでもない方向へどんどん歩き始めていることに気づいた。いよいよ身に危険を感じた。勇気を出して逃げ出すことにした。突然思い切って走り出し二人から離れた。

ケネディ空港の外国人は皆冷たかった。いくら英語でJALカウンターの場所を教えてもらおうとしても誰も相手にしてくれなかった。記憶をたどってとりあえず何とか到着ロビーまで戻った。しばらくしてやっと見つけた日本人らしき人に話しかけ「日本の方ですね」と確認すると日本人だった。親切にJALカウンターまで連れて行ってもらった。この時程、同じ日本人同士の良さを痛感したことはなかった。JALカウンターで日航社員にさっそく出来事を話すと「本当によかった」「最近被害が多く特に一人旅の日本人ばかりが狙われている」「とんでもないことになるところだった」と言われ思わず背筋が寒くなった。

タクシーに乗せる。空港の周辺をグルグル走り回らせて引き回す。部屋に監禁する。持ち金全部をまきあげる。要するに「金」が彼らの目的だった。「MR. KANI」の貼紙の意味がやっと分かった。

JALカウンター近くからの送迎バスに乗りホテルに着いた。ホテルではシャワーを浴びて食事をしひと眠りするつもりだった。だがシャワーも食事もままにならなかった。シャワーと食事の後はホテルの部屋からただボンヤリと空港付近のニューヨークの町並を眺めてばかりいた。まんじりともしないで乗り継ぎの夕方までの長い時間を疲れと孤独感と共に過ごしたことを今でも鮮明に覚えている。

再びケネディ空港に戻り目的地への飛行機に乗り継いだ。幸い同じ飛行機で同じ目的地に向かう日本人グループがいて一緒することになった。これで乗り継ぎは助かった。日本での出発日の翌日午前中に無事目的地に着いた。空港まで出迎えてくれた駐在オフィスの現地運転手に「MR. KANI？」と聞かれて近づかれた時、「本当に駐在オフィスの人か」と無意識に聞いてしまった。ニューヨークでの出来事がとっさにそうさせてしまったのかもしれない。随分すまない思いをさせたと反省した。後で首席駐在員を通じて謝ってもらったが「数ある出迎えの中で確かめられたのは初めてだ」と言われた。

任務を無事終え約2ケ月後に同じニューヨーク経由のスケジュールで帰国の途に就いた。駐在オフィスの運転手に空港まで送ってもらった。滞在中に回復した絆で彼とは固い握手をして別れることができた。

ケネディ空港での乗り継ぎ時間は1時間と短かった。到着ロビーという同じ場所で、同じ二人の男が同じように一人旅の日本人に話しかけている光景をまた見ることになった。まったく驚いてしまった。

成田への便に乗り込むと先ずは大好きな昔楽を聴くことにした。ヘッドホンから聴こえてきたのは何と不思議なことに当時ヒット中の島倉千代子が歌う「人生いろいろ」だった。「人生いろいろ」これでやっと日本に帰れると本当に心からほっとした。

多治見市政と特派員制度

多治見市長の西寺雅也氏が我が母校の２回生であることは、皆さんご承知のことと思います。西寺市長は今、市民の行政に対する信頼を確立すべく、市職員の先頭に立って日夜奮闘されております。

その市政への取組みの一端が東濃新報に掲載されておりますので紹介します。また、この記事にもあります“人のネットワークづくり”に関連して、今年10月、「多治見市特派員制度」が設置され、平成10年４月より活動を開始します。

本東京支部にも支援要請がありました。本制度の目的は“市外から広く情報を収集すると共に、多治見市をPRする”こと、対象者は“満18歳から満65歳までの多治見市出身者及び多治見市に縁のある方で、「ふるさとに対する思い入れ」がある各分野の方々”とされております。

東京地区から50名程度ということで、本東京支部から支部長推薦で理事の方々が選任されました。北高東京支部も積極的に支援の方針ですので、選任された方々はもちろん、本制度に協力頂ける同窓生の皆さんには建設的な情報をドシドシ、下記にお寄せ下さい。

〒507 多治見市日ノ出町２丁目15番地
多治見市役所人事秘書課　加地、吉村
TEL：0572-22-1111　内線424
FAX：0572-24-0621

「痛み」こらえ　再スタート

多治見市長　西寺雅也

国、県、市町村を問わず、行政の置かれている状況はかつてないほど厳しいものがあります戦後五十年の歩みの中で行政の中にある種の淀みと停滞が生じてきたこと、国の行政へ権限の集中やそれに絡む利権の発生など、また、公金の不正支出にみられるような地域の住民から乖離した行政の姿など次々に問題が発生しています。今ほど行政に対する市民の目、県民の目、そして国に対する目が厳しい時代はありません。

厳しさのもうひとつは国の財政同様、自治体の財政も悪化してきていることです、バブル崩壊後税収が落ち込み、またバブル期に膨らんだ財政、特に「箱物」と呼ばれる各種の施設建設によって、借金（市債）を抱え、その返済がこの時期ピークを迎えること、それらの管理・運営の経費増大などが重なった結果です。

多治見の場合、これまで先送りされてきた事業の中には市民生活に密着したゴミの焼却施設、埋立て施設、市民病院の改築などがあります。こうした巨額の経費を必要とする事業を立ち上げなければなりません。道路網の整備（外環状、内環状など）など都市基盤整備は緊急の課題でもあります。

今、市民と行政の信頼関係の確立、財政再建（改革）、行政の改革などが必要です。多治見市では来年一月一日から情報公開条例を施行する予定です。条例のスタート当初は様々な混乱や戸惑いも生じると思いますが、長い目でみれば市民と行政との間の信頼関係を築く上で寄与すると考えます。

また、行革の一環として過去最多の異動を伴う機構改革を行い、三部五課の削減を図りました。必要な部には企画担当課をつくる、縦割り行政の弊害をなくしていく、市民からみてわかりやすい機構にする、重点的な施策の担当部署をはっきりさせるなどを目指しています。そして、今後とも事務事業の見直しを継続していきます。

その一方で財政緊急事態宣言を出し、それに基づき「超緊縮型予算」を組みました。この過程で経費節減のために、いろいろな制度などの見直しをはかりました。その結果市民にも、また職員にも「痛み」を感じるという局面がいくつか生じました。

しかし、市議会の議論でも多くの議員さんから、「緊縮緊縮といっていたが、結構やっているじゃないか」という評価を受けたように、決して消極的な予算だとは思っておりません。これから出発という施策を多く採用し、額としては決して多くはありませんが、今後育てていける事業を予算化しています。今後は予算編成のあり方も含め、重点的施策の選択的採用など、財政そのものを見直していきます。

今年度、初めて若い職員を自治省、岐阜県の東京事務所、瀬戸市へ派遣しました。もちろん本人たちの研修のためですが、もうひとつ情報の収集、人のネットワークづくりを意図したものです。「内気」な多治見市からの脱皮を目指しています。

（東濃新報より転載）

第8回支部総会・懇親会のご案内

日時：平成９年11月８日（土）（２：30開場）
総会　15：00〜15：30
フォーラム　15：30〜17：00
懇親会　17：00〜19：00

会場：芙蓉銀座クラブ　TEL03-3535-2441
東京都中央区銀座2-2-2　新西銀座ビル

懇親会費：一般　7000円
学生　4000円（新卒業生は無料）

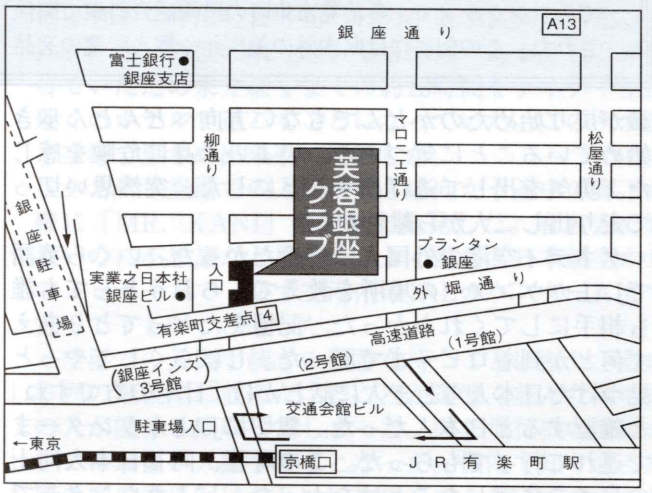
フォーラムの内容：

今年は新進気鋭の外科医（８回生）二人による下記題名の講演を予定しております。

“大腸がんのお話”
日本医科大学　外科医　横井公良　氏

“内視鏡下手術のその後”
亀田総合病院　外科部長　加納宣康　氏

ご期待ください!!



尚、当日は小芝同窓会長、母校より生田校長先生、同窓会係　有賀欣哉先生、藤掛直弘先生、谷村真一先生、本校OB高木久美氏（18回生）をお迎えしますのでご歓談頂きたく存じます。

又、当日ご出席の場合は年会費を併せてご入金下さいますようお願い致します。（一般3000円、学生1000円）

編集後記

会報も今回より、皆様の要望に答え、幾分活字を大きくしました。年一回の発行でありますが、多くの同窓生に投稿頂き、故郷の話題、会員の身近な情報を収載、会報の充実を図りたいと考えております。昨今、同窓生の海外駐在も多くなって来ました。これから海外に駐在される方、又、海外駐在の同窓生の住所等消息を知っている方は下記の会報係りまで連絡下さい。海外ニュースとして皆さんにお伝えしたいと考えております。

連絡先：〒338　浦和市上木崎1-10-1-1203　愛知紘治
TEL：048-825-0215
〒131　東京都墨田区立花6-8-304　原田英明
TEL：03-3616-5398